

■開催概要

- シリーズ名称 : 2020 鈴鹿クラブマンレース Round 4
- 主催 : 熱田レーシングクラブ (ARC)・鈴鹿モータースポーツクラブ (SMSC)
- 協力 : ARCN・AASC・OCCK・KRHC・チーム淀...
- 競技 : JAF公認・準国内格式 公認番号2020-2004
- 会場 : 鈴鹿サーキット フルコース (5.807km)
- 開催レース : 総参加台数／106台
クラブマンスポーツ／38台
RS・CS2／17台
スーパーFJ／27台
FFチャレンジ／24台
- 開催日 : 2020年7月25日(土)・26日(日)
- 天候 : 雨時々曇り／25日(土)、曇りのち雨／26日(日)
- 路面 : ウェット／25日(土)、ドライ→ウェット／26日(日)

■次回レース開催概要

- 開催日 : 2020年9月20日(日)
- 主催 : 京都レーシングハイブリッドクラブ (KRHC)・鈴鹿モータースポーツクラブ (SMSC)
- 会場 : 鈴鹿サーキット 西コース (3.564km)
- 開催クラス : F4、スーパーFJ (2レース)、FFチャレンジ、RS／CS2、フォーミュラEnjoy



7月25日(土)・26日(日)の2DAYS大会となった鈴鹿クラブマンレース第4戦。2日間を通じてウェット路面の時間帯が長かった
(写真はFFチャレンジの公式予選直前)

4カ月ぶりにリスタートした鈴鹿クラブマン! 熱い戦いが2日間にわたって展開された!!

国内外における新型コロナウイルス感染拡大を受け、開催が中止となった鈴鹿クラブマンレースの第2戦と第3戦。当初のスケジュールでは第2戦にクラブマンスポーツとCS2の混走による60分耐久レースが盛り込まれており、第3戦では「SUZUKA Race of Asia 2020」の併催も予定されていたが、残念ながらそれらも中止とされた。そして7月25日(土)・26日(日)、実質的には今シーズンの2戦目となる鈴鹿クラブマン第4戦が開催された。

入場ゲートにおける検温の実施、パドックへの入場時のマナー徹底、レース参戦者に限定した場内ではマスクの着用やソーシャルディスタンスを確保することなど、考えうる様々な感染予防対策を講じて開催したこの第4戦は、25日(土)に各カテゴリーの公式予選とクラブマンスポーツの決勝レースが行われ、翌26日(日)にクラブマンスポーツ以外の決勝レースが行われる2DAYS大会として開催された。また、鈴鹿初開催となる「インタープロトシリーズ」と「KYOJO CUP」、そして「N-ONE OWNER'S CUP」といったワンメイクレースも開催され、各レースで熱いバトルが披露される2日間となった。

梅雨の末期に開催された今回は、25日(土)が朝から雨。午前中は激しく降る時間帯もあったが、公式予選が始まる頃には小降りに。各選手がヘビーウェットからハーフウェット、そして再びウェット路面へと移り変わる難しい路面コンディションを果敢に攻略した。

翌26日(日)も朝まで雨が降っていたが、次第に曇りに。路面はレコードラインがほとんど乾いたハーフウェット状態となり、その後さらに天候が回復し、RS/CS2の混走による決勝レースはドライ路面で開催された。しかし再び雨が降りはじめ、路面はヘビーウェットに。スーパーFJとFFチャレンジはセーフティカースタートとなった。

次回は今シーズン唯一の西コース大会。JAF地方選手権F4や2レース制で行われるスーパーFJなど、観戦し甲斐のあるカテゴリーのレースが展開されるこの第5戦にも是非注目していただきたい。



公式予選、決勝レースとともに路面コンディションが何度も移り変わる週末となった
(写真は公式予選中にタイヤ交換をするスーパーFJの各チーム)

■クラブマンスポーツClass

セーフティカースタートにより決勝レースがスタート。ポールポジションスタートの元山泰成がリードを築いて1コーナーへと飛び込んで行く。その後方でバイエルン松尾が単独2位を走行。さらにそこから離れて中里紀夫、山谷直樹、RYUの3台がテールtoノーズのバトルを披露する。オープニングラップで山谷とRYUが中里をパス。3周目になると、山谷、RYU、中里もそれぞれ単独走行となる。次第に中里と小西岬がRYUの背後に接近。5周目のシケインで中里がRYUに並びかけるが、パスするには至らない。6周目のS字コーナーではRYUが再び中里を引き離すことに成功。7周目の1コーナーで中里がRYUをアウトからパスするが、同じ週のダンロップコーナーでRYUが中里を抜き返す。結局、元山、松尾、山谷のオーダーでチェッカー。RYUが4位で、中里が5位でそれぞれレースを終えた。



公式予選で元山泰成が唯一、2分27秒863をマーク。決勝レースではその元山が良いスタートを切りオープニングラップから独走状態に。後続に5秒196ものアドバンテージを築いてトップチェッカーを受けた

■RS・CS2 Class

ポールポジションスタートの佐藤敦がスタートで出遅れる。ホールショットを奪ったのは3番グリッドスタートの大城一。それに2番グリッドスタートの阿部博行、4番グリッドスタートの近田直人と続く。順調に順位を回復した佐藤がオープニングラップのスプーンカーブ手前でトップに。その佐藤、大城、近田のオーダーでオープニングラップを帰ってくる。オープニングラップ終了時点で大城以降に1秒629ものアドバンテージを築いた佐藤は2周目にはさらにタイムギャップを広げることに成功。CS2クラスでは金久憲司、いむらせいじ、松本吉章、FLYING RATが周回ごとに順位を激しく入れ替えるバトルを展開。レース中盤以降の見どころを作る。トップチェッカーを受けたのは佐藤。佐藤がRSクラスのウィナーに輝いた。CS2クラスを制したのは総合6番手でチェッカーを受けた金久だった。



佐藤(写真右)がポールtoウィン飾り、RSクラスのウィナーに。クラス2位は近田直人(写真左)だった



CS2クラスでは金久憲司(写真中央)が優勝。松本吉章(写真左)が2位、いむらせいじ(写真右)が3位でそれに続いた

■スーパーFJ Class

ポールポジションスタートの板倉慎哉と2番グリッドスタートの元嶋成弥がテールtoノーズの状態で行く。元嶋が2コーナーで板倉をパスしてトップに立つ。元嶋、板倉の背後を4番グリッドスタートの岡本大地が走行。元嶋、3番グリッドスタートの宮下源都、岡本、板倉のオーダーでオープニングラップを終える。その直後、ピットロードのスピード違反のため、宮下にドライビングスルーペナルティが出される。次第に元嶋は単独トップに。しかし、130Rで複数台がクラッシュしたことにより、セーフティカーがコースに入る。リスタートする直前のシケインで元嶋がコースアウト。すぐにコースに復帰した元嶋の直後に岡本がつける。8周目の1コーナーで元嶋が単独の-spin。これによりトップに立った岡本が元嶋以降に5秒673のアドバンテージを築いてトップチェッカーを受けた。



ヘビーウェット路面になったため、決勝レースはセーフティカースタートに。板倉慎哉を先頭に果敢にコースに挑んでいく



レース中にもセーフティカーがコースに入った厳しいレースを制したのは岡本大地(写真中央)。岡本は開幕戦に続いて2連勝を飾った

■FFチャレンジClass

スタート直前に雨が強くなり、スタートディレイに。予定より遅れ、セーフティカースタートにより、レースが開始される。毛利有佑、中村拓矢、坂和晃と、グリッドのオーダー通りにメインストレートに帰ってくると、毛利が若干リードを築いて1コーナーへ。すぐに坂が中村をパスする。毛利、坂、中村のオーダーでオープニングラップを終了。その時点で毛利は坂以降に2秒833ものアドバンテージを築くことに成功する。坂が3周目の逆バンクコーナーでスピン。これにより、中村が単独2位となる。そこから若干遅れ、田中秀和、大東寛和、大森和也と続く。次第に田中、大東も単独3位、単独4位に。4周が終了する頃、再び雨脚が強くなったため、セーフティカーがコースイン。結局、コンディションが回復することなく、そのままレースが終了。毛利のポールtoウィンが決まった。



強い降雨により、スタートがディレイに。ポールポジションスタートの毛利有佑以下全ドライバーが天候の回復を待つレースとなった



オープニングラップから後続を引き離れた毛利(写真中央)がポールtoウィン。それに中村拓矢(写真左)、田中秀和(写真右)と続いた

Voice of Pick up Driver

この日、キラリと光った
ドライバーに一問一答

この日、キラリと光ったドライバー&チームに一問一答
「Voice of Pick up Driver&Team」。

RS Class／CS2 Classでポールtoウィン！

佐藤 敦 選手(佐藤製作所・KK-LM☆制動屋)



Q: 公式予選で断トツのトップタイムをマークしました。どんな作戦があったのでしょうか。

「コースインしたらバイザーに雨粒が当たり始めたので、コースイン1周目、2周目でフルブッシュしました。コースインが遅かった選手は気持ち的にもブッシュできなかったと思います。早めにコースインして正解でした」

Q: スタートでは出遅れましたが、オープニングラップで見事トップに返り咲きましたね。

「上位の選手がバトルをしている間に接近することができました。ヘアピンから200Rにかけて立て続けにパスすることができ、トップに立てました」

Q: トップに立った後は独走状態を築きましたね。

「ミラーを見ながらドライブしていたのですが、後続の選手がバトルをしていたので、単独となった自分には逆に有利だと思いました。トップに立ってからも自分が納得できるタイムで走ろうと頑張りました」